

写真募集

社会の動向に鋭い視線を投げかけ、情熱を燃やす新進写真家へ！
公益社団法人日本写真家協会が公募する

2021年 第16回「名取洋之助写真賞」

締切：2021年8月20日(金)消印有効
持参の場合は午後5時まで

応募資格：36歳まで(1985年1月1日以降生まれ)の方
提出作品：六ツ切またはA4サイズの同一テーマの作品30点
応募用紙はJPSホームページ <https://www.jps.gr.jp/> から

2019年 第15回名取洋之助写真賞受賞作品

2019年 第15回名取洋之助写真賞：
和田 拓海「SHIPYARD～翼の折れた天使たち」



2019年 第15回名取洋之助写真賞奨励賞：
藤本 いきる「おじりなりてい」



写真募集

公益社団法人日本写真家協会は、“新進写真家の発掘と活動を奨励する”ために、36歳までの写真家を対象とした**2021年 第16回「名取洋之助写真賞」**の公募を行います。
時代を捉える鋭い眼差しと豊かな感性による、斬新な作品を期待します。

【応募要項】

●応募資格

応募者は36歳まで（1985年1月1日以降生まれ）の方で、プロ、アマチュアは問いません。
※2020年は募集を中止した為、2021年に限り応募資格は36歳までとします。

●応募規定

- 1：発表、未発表を問いませんが、他のコンテストで受賞が決定または内定しているものは除きます。
- 2：フィルム、デジタルなど、いずれで撮影されたものでも構いません。ただし加工・合成処理したものは不可とします。
※受賞作品は写真展用に大伸ばし（半切～全紙）にしますので、デジタルの場合は、撮影画素数にご留意ください。
- 3：提出作品は、六ツ切（8×10インチ）またはA4サイズの同一テーマの作品（プリント）30点。
作品は額装、台紙貼り、製本、ファイリング等はしないでください。
※必ず作品の順番が分かるよう、裏面に番号を明記してください。
- 4：応募作品に添付するもの、撮影者履歴、題名（タイトル）、撮影意図（800～1000字以内）を同封。
- 5：公序良俗に反しないもの、被写体の肖像権のほか管理、所有権等について問題が生じないもの。
- 6：受賞作品の原板等を提出していただきます。原板は使用後返却します。

●選考委員

山田健太(専修大学教授)、野町和嘉(写真家・日本写真家協会 会長)、清水哲朗(写真家・日本写真家協会 会員) (予定)

●賞金等

名取洋之助写真賞 1名 賞金 30万円、及び
JPSが企画する写真集の制作(写真集の印税等は発生しません)
名取洋之助写真賞奨励賞 1名 賞金 10万円
東京、大阪で受賞作品 写真展の開催予定

●著作権・使用権について

- 1：受賞作品の著作権は撮影者に帰属します。
- 2：受賞後2年間、名取洋之助写真賞の広報・宣伝活動に優先して使用します。
ただし、その後も協会のPR活動や歴史展、沿革史等に掲載させていただくことがあります。
※データは上記目的以外には使用いたしません。

●応募期間と送付・提出先

- 1：応募期間 2021年7月1日(木)～8月20日(金) 消印有効。持参の場合は午後5時まで。
- 2：送付・提出先 書留郵便または宅配便(送料は応募者負担)または持参。

〒102-0082 東京都千代田区一番町25番地 JCIIビル303

公益社団法人日本写真家協会「名取洋之助写真賞」係

TEL：03-3265-7451 FAX：03-3265-7460 <https://www.jps.gr.jp/>

●作品の返却

- 1：応募作品は受賞作品発表後2カ月以内に返却します。
- 2：返却希望の方は、返却希望と朱書きしてください。受取人払いの宅配便にて返却します。梱包資材等は返却いたしませんのでご了承ください。※受賞作品の返却及び海外への返却はいたしません。

●応募票

応募票は日本写真家協会(JPS)のホームページからダウンロードするか、FAXにてご請求下さい。

<https://www.jps.gr.jp/> FAX:03-3265-7460

●名取洋之助(1910～62年)

ドイツに留学していた名取洋之助は23歳の若さで、1930年代ヨーロッパで勃興していたフォト・ルポルタージュをわが国に導入し、木村伊兵衛らと33年「日本工房」を興す。その後、土門拳、藤本四八、亀倉雄策らと『NIPPON』を創刊し、フォト・ジャーナリズムを確立する。戦後は47年に『週刊サン・ニュース』を創刊。50年に『岩波写真文庫』を創るなど、写真家であると同時にすぐれた企画、編集者でもありました。名取氏は、1950年の協会設立初期から写真企画展への助言。没後、名取洋之助が関わった日本工房、サンニュース、岩波写真文庫の創設に関してわが国のフォトジャーナリズムの発展に大きく貢献されたことを顕彰し、主として若いフォトジャーナリストの育成に役立つことを望み、この写真賞を創設しました。

